

古代インドの女性観 (3)¹ —貞女、烈女、淫女—

原 實

この一連の論考の中、その第一は古代インドの女性観一般を概観し、第二は特定の物語を邦訳解説する形を採った。今回は上記の副題に見るように三種類の女性物語から典型的なものを選んで翻訳し解説する事とした。

I 「貞女」

既に言及した通り²古代インドの貞女物語の中でも、特に有名なものの一つとして *Mārkaṇḍeya Purāṇa* 16.14以下のものがある。この物語は癩病やみの我侬勝手な夫に虐待されつつも、夫を神の如く崇めて奉仕する妻の物語で、古代インド男尊女卑の最たるものの一つである。貞女といっても極めて特殊な部類に属するから、その徹底せる奉仕の功德も又格別で、自然界の運行を支配する事が出来た。もと古代インドにあって女性は自ら苦行する資格がなく、従ってその功德にあやかる事もなかったと言われるが、貞操の誠を尽くす女性には男性苦行者が身に付けた験力に匹敵する神秘力が培われ、それは想像を絶する奇蹟を現成し得ると言われた。³ 彼女の現じた奇蹟は自然現象を左右して、日の出をも不可能としたと伝えられ

¹ 本稿はもと平成15年度本学演習において講読したものに若干の修治改善を施したものである。演習の質疑に積極的に参加された諸君に感謝の意を表する。

² 原 「古代インドの女性観」(1) 本学紀要5 2002 p.201.

³

*satī-daiyata-viprāṇām apy ekasya prakopataḥ
śruto hi prativṛttāntaṃ trailokyasyāpi viplavaḥ (IS.6703)*

る。以下に關係部分の邦訳を試みるであろう。

プラティシュターナの都に、カウシカ姓を名乗る或るバラモンが住んでいた。彼は他世に犯した各種の悪業の故に、癩病を患う身となっていた。⁴
(14)

この様に病める身の彼をその妻は、手足に膏油を塗ったり、⁵ 按摩したり、入浴させたり、着物を着せたり、食べさせたりして、神の如く敬っていた。
(15)

粘液(痰)、糞尿の始末から、血が出れば拭いたり、睦言房事、優しい言葉をかけたりして。
(16)

彼女が常に、いとも慎ましく奉仕していたにも拘わらず、彼は性残忍、直ぐに短気を起しては、彼女を虐待していた。
(17)

それでも、この従順な妻は彼を神と思い、全く厭わしい男であったにも拘わらず、彼を最高の男と思っていた。
(18)

そもそも言う事すら出来ないくせに、或る時このバラモンは、妻に向かってこんな事を言った。「俺を彼女の家に連れて行け。
(19)

大通りに面した家に住んでいる遊女を、俺は見初めてしまった。彼女の所へ俺を連れて行ってくれ、貞女よ、俺は彼女が好きで堪らないのだ。
(20)

俺がああ若い娘に会ったのは、日の出の頃であったが、もう日はとっぶり暮れて夜になってしまった。会った途端にもう、彼女は俺の心から離れない。
(21)

からだつき全体が可愛らしく、臀部も胸もふくよかな⁶彼女が、俺を抱

⁴ 古代インドの場合、不具者乃至身体障害者は社会の同情や救済の対象とはならず、寧ろそれらはすべて過去の悪行の結果とされた。Cf. MS.11.48-54.

⁵ この部分は患部、傷口の塗油、患部の手当ての義以外に *āṅga*, *abhyāṅga* を前接辞置掛けによる「手足の細部に至る迄」の義に取る事も可能である。

⁶ 身体の真ん中の (*madhyamaka*) 腰の部分が細く、乳房とお尻の丰满なのは古代インドの美女の典型とされていた。彼女はしばしば祭式の火壇 (*vedi*) に比較さ

いてくれないと、俺は死んでしまったも同然だ。(22)

恋は気まぐれ⁷、多くの男が彼女を求めている。でも俺は(そこへ)行く事が出来ない。それが何とも苛立たしい」(23)

恋に悩む夫の、この言葉を聞くと、彼の妻はもともと良家の育ちであり、且つその立派な事たる、貞女の鏡であったから、(24)

しかと帯を締め、売春代を何時もより余計に用意して、足元覚束ないまま、夫を背負い、

空一面に雨雲が蓋い、時折走る稲妻に僅かにそれと知れる大通りへ、唯々夫を喜ばせようと心に思いながら、真夜中にこのバラモン女は、出掛けて行ったのであった。(25-26)

道すがら、暗闇の中、泥棒でもないのに、泥棒の嫌疑をかけられて磔にされ、ひどく苦しんでいるマーンダヴィヤに、そのカウシカ姓のバラモンは、

妻の背中に背負われたまま、足で触れてしまった。すると、足蹴りされたと思ったマーンダヴァは⁸怒って、彼に向かって次の様に言った。

(27-28)

「この様に、ひどく苦しんでいる俺を、事もあるうに足で衝いた奴は、性悪しく、最低の男に違いない。であるから彼は悲惨な境遇に陥った(も同然)。⁹ 必ずや彼は太陽が昇ったら、命を落す事となるであろう。太陽が照らし出すと、¹⁰ その途端、彼は破滅するであろう」(29-30)

するとこの、いとも恐ろしい呪いの言葉を聞いて、恐れ戦いた彼の妻は

れる。

⁷ Cf. *aho kāmasya vāmā gātiḥ: Gītagovinda* 12.3. Hara, 1986.84

⁸ Cf. Wezler 1996. J.444 (Hara, *Weapon of Virtues to be published in Gedenkschrift W. Halbfass.*)

⁹ *anuprāpta*: 過去分詞によって命令法に近い、事の必然性を意味する呪詛の用例は他にも見られる。

¹⁰ この *ālokana* の語を「太陽の照明」と同様に、「太陽を見る事」の義に取る事も可能である。前者の場合は外界の照明、後者の場合は眼光線の概念に当る。この問題については Roesler 121ff.

「絶対に太陽が登りません様に」と宣言した。(31)

すると、太陽が登らなくなってしまった。その結果、何日も何日も夜が続いたままとなった。そうなると今度は、神々が怖れて身の危険を感じるようになった。(32)

「(ヴェーダ) 聖典を唱える事も 祭詞 *Vaṣat(-kāra)*、供物の神酒 *Svadhā*、祈祷の終りの祝辞 *Svāhā* も無くなってしまったら、どうしてこの世界が悉く破滅せずにいられようか。(33)

昼と夜の区分が無くなってしまうと、(一と) 月とか、(六) 季節とか(の区分) も無くなってしまう。そうなると、太陽南行、北行の(一年の) 二(区分) も、判らなくなってしまふ。(34)

この(夏至冬至の) 日至が判らなければ、一年という時の流れがどうして判るであろうか。歳(という単位) が無くなると、それ以上の時の流れを知る術も(全て) 無くなってしまふ。(35)

貞女の宣言によって、今や太陽は登らない。太陽が登らなくなると、沐浴、布施等諸々の(宗教的な) 営みも無くなってしまふ。(36)

火を置き換える事もなければ、祭式自体がなくなる事となる。(人間界で) 護摩(を焚く事) がなくなると、我々(神々) の栄養それ自体も誠に覚束ない。(37)

我々は人間共の、時宜に適った祭式の分け前(に与かる事) によって養われている。(その代りに) 我々は雨(を降らす事) によって農産物を稔らせ、彼等人間共を慈しんでいるのだ。(38)

植物が繁茂した時、人間共は祭式を催して、我等を祀る。我々は彼等の祭式その他により供養され、(その代償として) 彼等の望みを叶えてやっているのだ。(39)

下方に向かって我等は雨を降らせ、人間共は(謂わば) 上方に向かって雨を降らせている。我々は水(の形の) 雨により、人間共は供物の(形の) 雨によって。(40)

我々の為に定期的な(宗教的) 行事も、臨時のそれも執り行なわない者共は、根性悪く貪欲で、自分で祭式の分け前(全部) を食べてしまふのだ。" (41)

これらの罪深き者、(我等の) 侮辱者共を懲らしめてやる為に、我々は水、太陽、¹² 火、風、大地を汚染してやろう。(42)

罪を犯した彼等は穢れた水を飲むなどして、彼等には死に至る幾多の、恐ろしい災難が惹き起こされる。(43)

反対に、我々を(神奠により) 喜ばせた後、その残余を食う、立派な(心掛け良き) 者共に、我々は芽出度き世界を用意する。(44)

確立された日の出の秩序がなければ、これら凡ては彼等に全く無い事となる」(と言って) 神々は、「一体どうしたら太陽が登るのであるか」と、互に話し合っていた。(45)

この様に集まって、祭式の断絶を心配している彼等神々のこの言葉を聞いて、造物主は(次の様に) 言った。(46)

「神々よ、火には火を、又苦行には苦行を¹³以って対処する道理である。それ故、私の言う事を聞きなさい。(47)

貞女の偉大な力の故に、太陽が登らないのである。それが登らない故に、人間共にも君達にも、破綻が降りかかって来たのである。(48)

それ故に、若し太陽の登る事を欲するなら、アトリの妻、徳高き貞女アナスーヤーに、礼を尽くしてお願いしてみろ」(49)

息子は言った。

彼等は出掛けて行って、彼女に礼を尽くして懇願した。すると彼女は、「何の御用ですか。出来る事なら何でも致しましょう¹⁴」と答えた。そこで神々は「以前の様に、夜が明ける様にして下さい」と懇願した。(50)

アナスーヤーは言った。

¹¹ 後述(44)の神奠の残余(*śeṣa*)を食う者と対蹠される。

¹² ここに列挙されるものは五大に他ならないが、*ākāśa=sūrya*と為す例は尋常でない。

¹³ ここに *tejas* は Kṣatriya、*tapas* は Brahmin の所有する力、乃至武器である。Cf. Hara, Weapons of Virtue, to be published in Gedenkschrift for W. Halbfass.

¹⁴ もとよりこれは所謂 *vara*-motif で、直訳すれば「願い事をお選び下さい」となすべき所であるが、現代邦語の意味合いは上の如くである。

「そもそも、貞女の神秘力 (*māhātmya*) を殺ぐ様な事は絶対に無理ですから、神々よ、寧ろ私はこの高貴な女性に礼を尽くして懇ろにお願いし、朝の来る様にして見ましょう。(51)

あの高貴な女性の御主人を死なさずに、然も今一度、昼と夜の区分が出来る様に何とか(やって見ましょう)」(52)

息子は言った。

神々にこう言って、この有徳の女性は彼女の家に掛けて行くと、相手は彼女に夫 (Atri) と彼女自身が元気で、恙無く義務を果たしているかどうか、訊ねた¹⁵ので、彼女も言った。(53)

アナスーヤーは言った。

「美しきお方よ、貴女はきっと御主人のお顔を見ているだけで嬉しいのでしょうね。何時も御主人を一切の神々よりも素晴らしい人とお考えなのでしょうね。(54)

私も夫への奉仕だけから、大きな果報を得ました。一切の欲望は叶えられ、為に諸々の障害は除かれました。(55)

高貴なお方よ、男は常に(その生涯の中に)返済せねばならない五つの負債を背負っています。¹⁶ 彼は又自己の階級の義務を遂行する事によって、財を蓄積せねばなりません。(56)

そしてその得た財を、然るべき器(の人)に正しく分配せねばなりません。彼は又、嘘をつかず、廉直で、苦行や布施に心掛け、常に憐れみ深くなくてはなりません。(57)

愛憎の念を去って、毎日聖典の定める宗教的行事を、心を籠めて力の限り、実行せねばなりません。(58)

高貴なお方よ、男性は大なる苦勞により、夫々自分の生れに応じた、プラジャーパティ等の(神々の)世界を順次に享けるのです。(59)

これに反して女性は、夫への奉仕だけで、この男性が苦勞して獲得した

¹⁵ ここに *kuśala* と *dharma* は夫々「肉体的」「精神的」健康の義であろう。

¹⁶ 「負債」は通常三 (*ṛṇa-traya*) を数えるが、時に四とも五とも言われる。Cf. Hara 1996 239-241. 但し以下にその五は具体的に述べられない。

功德の半分を頂戴する様になっています。(60)

女性にとって、別に独立の祭式も、祖先祭も、断食も存在しないのです。彼女達は夫に奉仕する事によってのみ、これらの望ましき世界に赴くのです。(61)

それ故に、高貴且つ立派なお方よ、貴女は常に夫に奉仕する事のみお心掛けなさいませ。蓋し夫は(女にとって)最高の帰趨なのですから。(62)

神々や、御先祖様や、来訪者に対して夫が恭しく¹⁷為すべき尊敬(の功德)の半分を、唯只管に夫を思う女性は、夫に奉仕する事だけによって、享受するのです」(63)

息子は言った。

彼女のこの言葉を聞くと、彼女の方も真剣に心籠めてそれに答え、アトリの妻アナスーヤーに次の様に言った。(64)

「嬉しや、有難や、心お優しき奥様、貴女が私の生活信条に共感して讚美して下さるとは。神々も又私を見そなわし給うというもの。(65)

女にとって、夫に等しい帰趨(救い)のない事を、私は承知しております。夫さえ喜んでくれれば、それはそのままこの世でもあの世でも、(女の)為になるのです。(66)

令名高き奥様、夫の機嫌さえ良ければ、この世でも又あの世でも、女は幸せです。蓋し夫は女の神様ですから。(67)

ですから仰って下さいませ、ご立派な奥様、私に、或いは私の主人に何の御用があって、わざわざ私の家までお越し下さったのかを、高貴なお方よ」(68)

アナスーヤーは言った。

「神々が帝釈天とご一緒に、私の所に来られました。すっかりお困りの御様子です。貴女の言葉によって、正しい宗教的行事も、昼夜のけじめも、すっかり無くなってしまったとかで。(69)

昼夜の区分が滞りなく旧に復する様にと、神々は私にお頼みになりました。そのために私は(ここに)出掛けて来たのです。ですから私の言う事

¹⁷ For *satkriyātaḥ*, cf. Thieme 124-129.

を聞いて下さい。(70)

昼がなくなると、凡ての祭式行事が無くなります。そうになると神々は瘦せ細ってしまうのです。功德を積んだお方よ。(71)

一日が始まらないと、全ての祭式行事が停止してしまいます。そうなる
と早魃になって、(人間)世界も破滅してしまうのです。(72)

ですから、若し貴女がこの世界を不幸からお救いになるお積りなら、高貴なお方よ、どうか世間に以前の様に、太陽が出るようにして下さい」
(73)

バラモンの妻は言った。

「高貴な奥様、実は私の(自在)神と仰ぐ夫は、マーンダヴァ(仙)によって呪われているのです。『太陽が昇ればお前は必ず死ぬ』と。あの怒りっぽいお方によって」
(74)

アナスーヤーは言った。

「素晴らしい方よ、若しお差し支えなければ、私は貴女の御言葉に従って、貴女の御主人を元通りの身体にして差上げましょう、否寧ろ新たに若返らせて上げましょう。
(75)

美しい方よ、私は貞女の偉大さが尊重さるべきものである事を、重く受け止めている積りでありますから」
(76)

息子は言った。

バラモンの妻が「はい、よく判りました」と言って承知した時、苦行を積んだアナスーヤーは十日目の夜半に、閼伽水を捧げて、太陽を召喚した。
(77)

すると、神々しくも太陽は、大きな日輪となって、パッチリ咲いた紅蓮の形をして、東山なるウダヤ山から昇った。
(78)

同時に彼女の夫は、息絶えて大地に倒れた。すると彼女は倒れた夫を抱きかかえた。
(79)

アナスーヤーは言った。

「芽出度き婦人よ、ご心配には及びません。久しき¹⁸夫への奉仕によって得られた私の力をご覧下さい、そして貴女の苦行の力をも。
(80)

私は、嘗て何処にも、夫に等しき男を見た事がない。容姿、人柄、知性、

優しい言葉を初めとする諸々の美点よりして。¹⁹ (81)

この真実に賭けて、このバラモンは、病からすっかり解放され、再び若くなくて、妻と共に（今後）百年の生命を得ます様に。 (82)

私は夫に等しい神をも見ない。この真実に賭けてこのバラモンが無病息災の身となって、今一度生き返ります様に。 (83)

私は常に、行い、心、言葉²⁰によって夫を喜ばす事に只管勤めております。（この真実に賭けて、）これなるバラモンが生き返ります様に」 (84)

息子は言った。

するとそのバラモンは病からすっかり解放されて、然も若返ってすっきりと立ち上がった。自分の光で家を照らしながら、恰も老いる事なき（常若の）神の様に。 (85)

すると花の雨が降ってきて、又天の楽器が響き渡った。神々は歡喜してアナスーヤーに次の様に言った (86)

神々は言った。

「願い事を叶えて上げよう、何なりと申すが良い。美しき婦人よ、汝は神々の為に大変よい事をしてくれた。それ故（我々）神々は、汝に願い事を叶えさす用意がある、苦行を積んだ女よ」 (87)

アナスーヤーは言った。

「若し、梵天を初めとする神々が、私（の所行）に御満足下され、願い事を叶える用意があり、且つ皆様方が私如き者でも、願い事を叶えるに値すると思召しであるのなら。 (88)

梵天、ヴィシュヌ、大自在天が私の息子とおなり下さいますように。そして私が夫と共に（解脱の）道²¹を見出して、（その結果）苦惱より解放さ

¹⁸ *kiṃ cireṇa* の読みに問題があるであろう。通常この種の構文には *kiṃ cit*, *kiṃ cana* が出て「女の夫奉仕によって若し幾許かの功德が積んであるなら」の義を示す故である。

¹⁹ 以下は有名な「真実語」の主題である。

²⁰ 漢訳仏典の「身口意三業」に相当する。

²¹ この *yoga* の語義は確定し得ないが、一応ここでは *Bhagavadgītā* の *karma-yoga*, *jñāna-yoga*, *bhakti-yoga* の *yoga* の意味に取って置く。

れますように」 (89)

「よし、判った、その様にして上げよう」と彼女に宣うて、梵天、ヴィシュヌ、シバ以下の諸神は、この苦行を積んだこの女に、然るべく礼を尽くして、立ち去って行った。 (90)

この物語がもと異なった幾つかの要素より成り、それらが合成されて現形を得たものであろう事は想像に難くない。原典の題名も *Anasūyā-vara-prāpti* (貞女アナスーヤーが願い事を叶える段) となっていて、冒頭の癩病患者の話も、行者マーンダヴァの話もその主題とされない。併し、貞女の験力が太陽すらも昇らせなかった事、又その験力を無効ならしめるのに同じ貞女の力が有効であったという物語の主題は、奇想天外なものとして古代インドの人口に膾炙していた。

物語は貞女の現じた奇蹟の他にも、古代インドの思想に特徴的な要素を幾つか具えている。礎になった仙人 *Māṇḍavya* の物語は独立の物語となって伝承されている。彼の呪いを貞女が無効にした行者と貞女の「呪力の腕比べ」のモチーフも古典インドに異質でない。人間が地上で催す祭式の停止によって神々が困窮する件は、古代インドの神人互惠の関係を雄弁に物語っている。貞女の験力を解くに貞女の力を以ってするという、「目には目を、歯に歯を」に類似したモチーフは、他にも見られる。²² のみならず古代インドに特徴的な「真実語」(*satya-vacana, sacca-kiriyā*) の主題もここに繰返され、貞女は夫への献身的奉仕を「真実語」の内容として宣言して太陽を昇らせ、又死者を蘇生させたのであった。

II 「烈女」

孟母断機に類する、心を鬼にして愛児を励ます母の姿は、武人の妻ヴィドラーの物語に見られる。これは大叙事詩第五卷 (MBh.5.131-134) に物

²² Cf. Hara, 2001 433 note 56.

語られ²³、通常「勝利と名づける物語」(*jayo nāmetihāsa*: MBh.5.134.17)と称せられ、大臣が君主にこれを語れば勇氣百倍、敵滅必定と謂われ(M Bh.5.134.15-16)、又妊婦がこれを聞けば勇士誕生を約す(M Bh.5.134.18-21)とも言われている。

場面の設定は、戦いに敗れて母の許に逃げ帰って来た息子をその母が叱咤激励するのを骨子としているから、そこに我々は武人の妻、武人の母の心得を伺う事が出来る。同時にそこには、烈女の蔑む「愛児溺愛」(*khalī-vātsalya*)の概念も見える。以下に邦訳を試みるが、本文中には時にかなり難解な部分がある。

第131章

クンティー夫人は言った。

敵を悩ます男よ、この事に就いて、人々が昔から伝えているヴィドラーとその息子の対話という物語がある。(1)

そこには誉高く、怒りを知り、²⁴ 良家の生れ、燦然たる彼女が、より高く、より卓れたものを(息子の為に)訓戒なすの責に任じた経緯が述べられている。²⁵(2)

彼女は武家の道を貴び、貧しからず、先見の明あり、武家の間に誉れ高く、文にも秀で、広く学問を修めていた。(3)

嘘の嫌いなヴィドラーと名づけるこの夫人は(或る時)、自分の息子がシンドウ王に打ち負かされ、意気阻喪して臥すを(見て)、彼のことを不甲斐なき男子、(武士の)道に外れ、却って敵を喜ばず者として非難叱責した。(4)

「息子よ、汝は妾の胎より生まれし者とも思われず、将又父の子にもあらず。一体何処の馬の骨か。怒りなき男は不能男に等しく、(幹部の器に

²³ この物語は夙に池田澄達氏によって紹介された。池田、pp.70-74.

²⁴ For *manyu*, cf. Hara 2001 431-433.

²⁵ 原文は三頌に亘るが、邦訳の便宜上分立した。

非ざる) 枝葉末節のみ。²⁶ (5)

生涯、汝は望みなし。高貴なるものの為、須く重荷を背負え。己を軽んずる勿かれ。ゆめそを粗末に扱うべからず²⁷。心を卓れて高貴なるものに向け、汝は恐るべからず。己を建て直せ。 (6)

立て、臆病者よ、(敵に) 敗れて斯くの如く臥すべからず。敵を悉く喜ばせ、身内を悲しませるは、矜持なき男 (の為す所)。 (7)

小河はたやすく満ち、鼠の掌は直ちに満たされる。臆病者は小成に安んじ、僅小にて満足す。 (8)

汝、敵の牙を撃ちその場で直ちに死するか、²⁸ (斯く) 生命の危険を越えて、尚生き長らえる暁には、更に勇武の程を示すべし。²⁹ (9)

天空に 鷹の如く旋回なしつつ、敵の弱点、隙を見出すべし。勇ましく名乗りをあげるとも、将又黙して怪しまれずとも (何れにても良し)。

(10)

汝は、何故に斯く雷に打たれし死者の如く臥すか。起て、意気地なし、ゆめ斯くの如く (敵に) 敗れて臥すべからず。 (11)

憐れむべき者として、ゆめ沈倫すること勿れ、己が所行により令名を轟かせよ。中位にも、末席にもあるべからず。将又下位にもあるべからず。常に強健たれ。 (12)

柿の木 (*tinduka*) の松明の如く、瞬時なりとも燃え盛れ。朽殻の火の如く、焰とならず (燻り続ける事) 勿かれ。烏の脛の如く、(細々と) 生き長らえんと欲するか。³⁰ 瞬時たりとも燃え上がるは、蓋し久しく燻る

²⁶ 原文 *upaśākhīya* の試訳に過ぎない。

²⁷ 原文 *mainam alpna bībharah* は難解である。

²⁸ *aher for arer* (蛇の牙). *ā śveva* (犬の如く)?

²⁹ 当然の事ながら、「牙」は「蛇」の連想を生むが、*api...api vā* によって導かれる ab と cd を肯定的連続的に取るか、対蹠的に取るかによって解釈が異なる。連続的に取る場合には「敵を撃って勇ましく討死せよ」の義、対蹠的に取る場合には「(弱虫は) 敵 (蛇) の牙に触れて (*ā-rujan?*) 直ちに死んでしまえ」となる。

³⁰ Critical Edition は *kāka-raṅkhā* の読みを取るが意味不明。数ある異読 (*kāla-kāṅkṣī*, *kākavan mā*, *kākavat tvam*, etc.) の中から *kāka-jaṅghā* を採用した。

に勝る。³¹ (13)

如何なる王家にも、温和なること、雌驢馬³²の如きは誕生すべからず。³³ 人事を尽くし、最後迄(力の限り)仕合の庭に疾走なすは、義務を全うなす所以。³⁴ 斯くて彼は己に恥じる事なし。 (14)

成るも、成らぬも賢者は後悔せず。間髪いれず実行なし、生命を後生大事にいとおしまず。 (15)

息子よ、気力を示せ、さもなくば(己が)義務を第一として堅固な道を行くべし。蓋し、汝は何の為に生き長らえる。 (16)

臆病者よ、供犠と布施(の功德)も、又一切の名誉も空し。(将来の)楽しみ根が既に絶たれてあれば、汝は何の為に生き長らえる。 (17)

身を挺して敵中に潜入し、脛に飛びつかんとて、敵を捕らえよ。(その身が)根絶するとも、ゆめ怯むべからず。駿馬の所行に思いを致し、重荷を背負い曳き行くべし。 (18)

勇氣と、矜持とを持せよ。己の男子たる所以を知るべし。而して汝の故に沈倫せる名家を自ら再興なせ。 (19)

後の人達がその所行を偉大なり、稀有なりと語る事なき男は、徒らに(家系の)系譜堆積するのみなれば、彼は女にもあらず、況や又男にあらず。 (20)

布施、苦行、勇猛、学問、利殖にその名を轟かす事なき男は、ただ母親の排泄物たるのみ。 (21)

学問によるも、苦行、繁栄、将又武勇によるも、(己の)行作により他の輩を凌駕する者こそ、蓋し男(の名に値いす)なり。 (22)

ゆめ、汝は下賤なる托鉢の生き方を望むべからず。そは卑賤にして、不名誉、惨め、男らしからぬ生き方なれば。 (23)

van Buitenen は do you want to live the fugitive life of a crow? と英訳している。

³¹ Cf. MBh.12.138.19.

³² *khali* は後出の *khari-vatsalya* (溺愛、盲愛) と連関するであろう。「甘やかしなし」の義か?

³³ Precative *jan-i* の読みを採る。

³⁴ For *ānr̥ṇya* cf. Hara 1996.

敵人の歓迎なす、無力なる男、世人輕蔑の的、衣食まなぬその日暮らし、悲惨にして生計も僅少なる小人、彼を身内に持つとて、人は愉しからず。(24-25)

国外追放、愉悅皆無、地位喪失、無一物となれば、我等はその場で生きるを止めて、寧ろ死を選ばん。(26)

善人の間に出色の誉なさざれば、名立たる家の断絶者、貧乏神、サンジャヤよ、我汝を産むとも、有名無実、息子とは唯名のみ。(27)

怒りを知らず、進取の気性なく、無気力にして敵人を喜ばす男、女と生れてなんびとも、斯かる男の母たらんとは欲せず。(28)

燻り煙るために燃焼すべからず。敵に襲いかかり、討って討って討ちまくれ。瞬時たりとも敵軍の頭上に焰となって燃焼せよ。(29)

怒りを知り、我慢ならぬ限り、彼は男なり。我慢なして、怒りなきは女に非ず、将又男に非ず。(30)

知足は幸運を逃す。同情も亦然り。無気力、恐怖の両者も然り。意欲なき者は大を享けず。(31)

これら欺瞞の諸悪より、進んで己を解放せよ。心を鉄と為して³⁵更に自ら(幸運を)求めよ。³⁶(32)

城砦を克服するが故に、男と言われる。³⁷この世に女の如く生きる男を、人呼んで名のみ空疎と言う。(33)

勇氣横溢、獅子奮迅の道行く(=獅子の足取なす)英雄は死すとも、その食べ残しに子孫は受樂す。³⁸(34)

自ら喜び、安穩を捨て、幸を求める者は遠からずして、身内に喜びを齎す。(35)

息子曰く。

³⁵ For *āyaśaṃ hr̥dayaṃ*, cf. MBh.3.28.5, 15.22.12, R.2..35.20. For *hr̥dayaṃ vajra-saṃhatam*, cf. MBh.12.22.9. 共に無慈悲の義に用いられる。原 1968 286-7.

³⁶ Text は *svakam* を採用するも、*śrī* の文脈である事と、35 b に見える *mṛgayase śriyam* の読みを徴して、ここは *śriyam* と読むべきか。

³⁷ *puruṣa* の Volksetymologie. Indra の別名 *puram-dara* との連想か。

³⁸ For *vighasa*, cf. Wezler 1978. 但し van Buitenen は *obsequies* と訳す。

(独り息子の) 我を無視して(顧みずば)、母様、全大地を以て如何せん。
将又諸々の装飾、財産、更にはいのち永らえる要ありや。³⁹ (36)

母曰く。

今日を尊ばざる輩の世界を、敵人は受くべし。されど、己を尊しとなす
者達の世界に、味方の人々は赴くべし。 (37)

身内の家臣に捨てられ、他人の施しに露命を繋ぐが如き、憐れなる勇気
なき者どもの生き方を真似るべからず。 (38)

バラモン、友人が汝に抛って生くるべし。一切生類が雨に、神々が帝釈
天に抛る如く。 (39)

サンジャヤよ、その男に一切生類が抛って生きる事、恰も熟せる実を結
ぶ樹木に抛る如き男、彼こそ生ける甲斐ある者となる。 (40)

その親族が、彼の武勇により安らげく栄える事、恰も神々が帝釈天のそ
れによる如き、英雄の生涯こそ誉れあり。 (41)

己が腕力一つに抛り、強く生き抜く男、⁴⁰ 彼はこの世に名を留め、死し
て天界を享く。 (42)

第132章

ヴィドラーは言った。

斯くの如き状態にありて、人事を(尽くさず、そを)放棄せんと欲せば、
汝は久しからずして卑しき輩の耽溺せる道を踏み行く事とならん。 (1)

勇を鼓して、力の限り気力を示さぬ武人、命を惜しめば、人々は彼を盗
人と知るのみ。 (2)

意味深長に、時宜に適い、有益なる言の葉も今や汝に届かぬ、薬物の瀕
死の者に無効なる如くに。 (3)

今、シンド王の家臣数多、喜びいるとも、(一たび彼等)不幸の暴流を
目の当りすれば、意気消沈して忽ち混乱に陥るべし。 (4)

彼方、此方より援軍を糾合なし、鼓舞激励せば、敵人は(皆)汝の男ら

³⁹ =MBh.5.133.3.

⁴⁰ *abhy-uj-jīvati* の意味不明。

しき勇を見て、次々に損われ行かん。(5)

彼等と結束なし、(敵)破滅の時を待ちつつ、険阻な山の要害に抛るべし。彼とて所詮不老不死の身に非ざれば。(6)

汝、その名はサンジャヤ(勝利)なるも、我はそを汝の中に見ず。息子よ、名に実あらしめよ、その名を空しうする事なかれ。(7)

汝幼少の砌、先見の明ある大智者バラモンは(汝を見て)宣わく、「この児は大なる困難あるも、再び大成せん」と。(8)

その言を思えばこそ、我は汝の勝利を当てにするなり。さればこそ、我が子よ、我は汝に言うなり、又繰返し言わんとするなり。(9)

その人の目的成就の暁に、よそ人も力づけられる如き男子、彼は折々の企画に在りて、目的に副って行動すれば、その目的成就是必定なり。(10)

事の首尾不首尾は、サンジャヤよ、(時の運)、そは先人も我も同じ。この道理を弁えて戦闘のみ心に思い、ゆめ後退する事なかれ。(11)

嘗てシャンバラ曰く、「これより悪しき状況なし、今日も明朝も、食を供する術なしとなすより」と。(12)

彼曰く、「これこそは、夫や息子の殺さるるよりも辛き苦、そは貧困なり。そは死と同義語なり⁴¹⁾」と。(13)

我はもと名門に生を享け、池より池に到る如くにして、⁴²⁾配偶者に恵まれ、凡て叶えられてあれば、何不自由なき生活を送れり。(14)

我が、壮麗なる花環、装飾を身に纏い、いと優美なる衣装を身につけたるを、友垣は以前見慣れしものを、今はいたく零落せるを見るのみ。(15)

(母なる)我と(汝の)妻の、いたく零落せるを見んか、汝はその時、生きるに意義なからんものを。サンジャヤ。(16)

従僕、下男、家臣、師、祭官、宮廷付祭官達の、賃金不払い故に、我等を見捨てるを見れば、汝は命永らえて何となす。(17)

⁴¹⁾ *paryāya-maraṇa*: 「反復の死」「死の連続体」(continual death: van Buitenen.)

⁴²⁾ For c., cf. MBh.5.88.91 (Draupadī). 「池から池に」は相応の名門に嫁いだという意味か。或いは「当てもなく」という意味か不明。文脈の流れは貧富交替する様を語る故に、後者の意味に用いている様でもある。

(我が為に) 昔日の如く誇るに足り、栄えあらしめねばと汝、今ここに
発奮するを見ざれば、我が心、如何で穏やかならん。(18)

バラモン達に「否」と(拒否の言を)言わんか、我が心臓は裂ける(思
い)。我も、我が夫も、嘗てバラモンに「否」の言をなしたる事なし。
(19)

我等は、もと(他人に)頼らるべき存在にして、嘗て他人に頼る者には
非ざりし。他人を頼り生き永らえるより、我は寧ろ死を選ばん。(20)

彼岸の見えぬ大海に、汝は我等の彼岸となれ。又救い舟なき所に、救い
舟となれ。不安定処に安定処を造り、息絶えし我等を蘇生せしめよ。(21)

汝、若し命を捨つる積りなれば、汝は敵人総てに抗し得る事必定。され
ど汝にして若し斯くの如き卑劣な生き様に抛らんか、(22)

己を卑しめ、意気阻喪するのみ。斯かる悪しき生き様を捨てよ。敵人一
人を殺すのみにても、人は勇者として令名を馳す。(23)

帝釈天は、ヴリトラ一人を殺して大インドラとなり、大インドラたるの
確固たる認知を得たり。世に自在神となるなり。(24)

戦場に堂々と名乗りを上げ、甲冑に身を固めたる (*damśita*) 敵人に挑
み、先陣を撃破して大将を殺し、(25)

正攻法に抛りて勇者が令名を馳せる時、その時初めて敵人は震え上り、
彼に屈服する事となる。(26)

戦線に身を挺する⁴³有為の士に、臆病者共は無条件降伏、彼を満たすに
一切の欲望成就を以てす。(27)

王国危殆に瀕し、(己が)生命の危険あるとも、勝れた武士は、敵を捕
えて一人たりとも残さず。⁴⁴(28)

王位は天国の門に等しく、又甘露に等し。その門は一人のみ入り行く狭
き道。斯かる思いを為して、汝は敵軍中に松明の如く突入せよ。(29)

王よ、戦場に敵を殺せ、而して己が義務を守るべし。栄光に酔う敵人が、
いと惨めなる汝を打ち眺める如き事、ゆめあるべからず。(30)

⁴³ *tyaktātmanam* の異読を採る。

⁴⁴ 文脈の流れよりして敢えて *na* 乃至 *a-* の異読を採る。

味方が嘆き、敵が豪語なす中に、惨めなる態なす汝を、我又惨めなる思いもて眺めんとは欲せず。(31)

以前の如く、己が富を誇る(味方) *Suvīra* の乙女達と共に過ごし、ゆめ意気消沈して(敵) *Sindhu* の乙女達の意のままとなる事なかれ。(32)

美貌、学問、家柄を兼ね具え、その栄光世に知られたる汝の如き若者が、荷に又頸木に繋がれたる牽牛⁴⁵の如く、零落してあれば、そは死に等しと我思う。(33)

敵に諂い、その後に従い行く汝を見んか、我が心は穏やかならず。(34)

他人の後を行く如き男は、この家に生を享けたる者に非ず。汝、他人の荷を負いては、命を永らえるべからず。(35)

蓋し、我は先祖伝来、子々孫々の讃えたる、万古不易の武士の心を知る。(36)

なんびとにあれ、ここに生を享けたる武士は、武士道を弁えれば、恐怖の故に生活の糧を求めて、なんびとにも頭を下げるべからず。(37)

只管、頭を上げるのみ、⁴⁶ ゆめ下げるべからず。常に努力精進、上昇志向なすは男の道。仮令閑節に非ざる所で折らるる事あるとも、⁴⁷ ゆめこの世に他人の前に頭を下げるべからず。(38)

狂象の如く尊大に闊歩せよ。頭を下げるはバラモンと人倫の道(の前)のみ。(39)

それ以外の階級の者は、彼等を支配下に抑え、友と語り、又己れ独り判断して、命ある限り、悪人を悉く懲罰なしてあるべし。(40)

第133章

息子曰く。

母様、鍛え上げて、貴方の心は黒金の如し。⁴⁸ 無慈悲にして、英雄のみ

⁴⁵ *anaḍuhvat?*

⁴⁶ *ud-yam-* (努力精進) を *nam-* の対蹠に於いて採る。

⁴⁷ *apy aparvaṇi bhajyeta* 部分を *bhañjyeta* に採る。若し元のままなれば、「不都合に遭遇するとも」となる。

⁴⁸ *saṃhatya* を副詞にとって「終始」と訳する事も可能であるが、今は *āyaśaṃ*

心に描き、⁴⁹ 何事も容赦せぬお方。 (1)

ああ、貴方が独り息子の私に、恰も他人に対する如く、斯かる言辞を吐きたまうとは、何たる武士の仕来たりか。 (2)⁵⁰

我を無視して(顧慮せざれば)、貴方に全大地(を得る)とて何の用かある。将又装飾品の要なく、諸々の享受も、更にいのち永らえるる事も。(3)⁵¹
母曰く。

愛児よ、蓋し凡て賢者の営みは、義務と利益に基けば、⁵² それを思いて、サンジャヤよ、我は汝を批議せしのみ。 (4)

この待ちに待ったる、千載一遇の好機、今到る。この好機到来する時に、汝にして若し為すべき事を成就せざれば、口惜しき極み、汝は賤しき業をなさん。 (5)

サンジャヤよ、不名誉に穢れし汝に、我若しこの事を忠告せざれば、⁵³ そを人は、(説得)力なく支離滅裂なる驢馬の慈愛(=盲愛)と、嘲(笑)せん。 (6)

善人の蔑み、愚者の踏み行く道を捨てよ。生類の兎角抛る無分別(*avidyā*)は蓋し大なればなり。 (7)

汝の行う所、若し善人の道に適えば、我は汝を愛しと思う。人事を尽く

hrdayaṃ nūnam: MBh.3.28.5, 15.22.12, *āyasaṃ hrdayaṃ kṛtvā*: MBh.5.131.32、及び *hrdayaṃ vajra-saṃhatam*: MBh.12.22.9等に徴して邦訳を試みる。

⁴⁹ *vaira-prajñā*: 「その知恵とかく不和に傾く」、「喧嘩にのみ知る」と取る事も可能であるが、*vaira* がもと *vīra* に由来する事実に鑑み「敵意」の訳を採らない。
“war-mongering,” (van Buitenen)

⁵⁰ 507* *niyojayasi yuddhāya para-māteva mām tathā*: 君は我を母ならざる人の如くに戦いに嗾け給う。

⁵¹ =5.131.36. 508* *mayi vā saṃgahahate priya-putre viśeṣataḥ* and 509* *mohāt saṃgahahase mātāḥ priyaṃ putraṃ viśeṣataḥ*: (母よ、迷って) 就中愛児を責めて。

⁵² *dharmārtha-kāmataḥ* の読みを採れば、「人生の三大目標に基ずいて」の義となる。Cf. also 5.133.8c.

⁵³ 510* *aham eva bhaveyaṃ te ripur atyantaro mahān*: 我自身、汝のこの上なき大敵とならん。

して天命を待つという、義務と利益のみに適う道、善人の踏み行くその道を踏み行くにより。(8)

斯く己を律する事なく、進取の気性なき子や孫⁵⁴に満足する者は、子孫を持つも空し。(9)

然るべき行作為さず、蔑まれたる行作為す最低の男は、彼此両界に幸を得る事なし。(10)

武人はこの世に、サンジャヤよ、戦いの為、勝利の為に創造せられてあり。人民守護の為なれば、彼は残忍なる行作も厭わず。(一度び戦場に赴けば) 勝つか、死するか、(何れに転ぶも) 彼は帝釈天の世界を享く。(11)

天界の芽出度き帝釈天の館には、武人が怨敵を降して享くる幸に等しき幸は存せず。(12)

(敵に) 卑しめれては、心ある男子、憤怒に焼かれる思いに、何時の日か必ず復讐せんと願ひ、(13)

己を捨つるか、敵人を斃すか、それ以外の仕方により、いかで彼に安息あり得ん。(14)

此の世に、賢明なる男子は、僅少を以って不快となす。僅かなるを快となす者は、世人に小器、不快なる者と映ずる事必定。(15)

快無ければ、男子は幸を得ず、滅に到る事必定。ガンジス川が海に到って(埋没)、無に帰する如くに。(16)

息子曰く。

母様、君は斯かる見解を述べ給うべからず、就中息子には。彼に憐憫の情を寄せ、聾啞者を見る如くしたまえ。(17)

母曰く。

汝が斯く(我に)従い、物事観れば、我殊の外嬉し。我に咎むべき所あれば、汝我を咎め、我は更に汝を咎めん。(18)

全シンドウ人を殺せば、我は汝を崇めん。我は汝の完全勝利の近きを見

⁵⁴ 511* *durvinītena durdhiyā ramate yas tu putreṇa*: 躰け無く、分別無き息子。

る。 (19)

息子曰く。

国庫疲弊し、援軍又皆無なる我に、いかで勝利あるべき。かかる厳しき状況を我と我が身に知ればこそ、王位より我が望みは止む、恰も罪業深ければ、天界への望み止む如くに。 (20)

母様が、何か然るべき方途を見出し給うなれば、そを我に教え給え。経験豊かな知恵持つお方よ、教えに従い、我はその凡てを實行せん。 (21)

母曰く。

息子よ、以前に失敗する事ありと雖も、それにて己を卑しむるべからず。財は消えては現れ、現われては又消え行くものなれば。 (22)

愚かなる青二才は、短気を起して事を企つべからず。行作は凡て常に必ずしも成就するにあらざればなり。⁵⁵ (23)

(事を起こすも、その結果は) 必ずしも思うに任せずと観じて、その人は成功する事もあらん、又失敗する事もあり。されど(行作を)為さざる人は曾って成功する事なし。 (24)

意欲を以って力を尽くさざる時、行為の結果は唯ひとつの道を辿るのみ、成らず(=失敗)。されど意欲を以って力を尽くす時、結果の辿る道はふたつ、成る(=成功)か成らぬ(=失敗)か。 (25)

凡て物事は常に必ずしも思うに任せずと (*anityatā*)、予め達観せる人は、逆境にも、繁栄と成功を推進し得。汝、王の子よ。 (26)

進取の気性を失うべからず、常に心してあれ (*jāgrtavya*)、成功に導く行為 (*bhūti-karman*) に精進せよ、「必ず成功あるべし」とのみ心に思い、バラモン、神々 (*īśvara*) 安らけく、彼等と共に常に吉慶 (*maṅgala*) を先となして。 (27)

息子よ、賢明なる王に久しからずして繁栄あり。幸運の女神は又、彼に訪れる。(闇黒の後に) 太陽の東方に現れる如くに。 (28)

例証 (*nidarśana*)、方便 (*upāya*)、鼓舞 (*uddharṣaṇa*) の数々、我は汝に示せり。我予見す (? *paśyāmi*)。男らしく振舞え。心に求める男

⁵⁵ For *anityatā*, cf. Hara 1959.

子の本懐⁵⁶を、汝はここに呼び込む事、可能なればなり。(29)

怒れる者、貪欲なる者、衰弱せる者、蔑まれし者、名誉を傷つけられし者、何人にてても可なり、張り合う気ある者を、汝、努めて糾合せよ。(30)

斯くすれば、汝は(敵の)大群を撃破せん。巻き起こる疾風の、雲を蹴散らす如くに。(31)

進んで彼等に与え、早朝決起、語を優しくせば、彼等は(汝に靡き)汝を悦ばせんと、汝を先頭に頂く⁵⁷事必定。(32)

敵人にして、相手の命懸けなるを知れば、忽ち彼は我等に恐れ戦く。家に入れる蛇を怖れる如くに。(33)

彼を勇猛なりと知り、所詮意のままにならずとなす時、誹謗によって彼を中傷せん。されど詰まる所(*antatas*)、事態は(彼に)好転せん。(34)

誹謗の後、ややあってそれも收まれば、財の増殖あるべし。蓋し財あれば友を呼び、友は財ある者を頼る。(35)

されど再び財を失えば、親族も彼を捨つ。同じ者なれど、人々は時に近づき、又時に遠ざける。(36)

敵を味方となして彼を信ずれば、彼が王位篡奪すること、そは有り得べき事なり。(37)

第134章

母曰く。

人に王たる者は、如何なる逆境にあるとも、ゆめ恐るべからず。仮令(内に)恐れ怯む事あるとも、(外に)恐れ怯む如き振る舞いなすべからず。

(1)

蓋し、王の恐れ怯むを見れば、全人彼に従い恐れ怯む。(人心離間)人民(*rāṣṭra*)も軍隊も大臣も、各自(勝手に)別様に思量すれば。(2)

或る者は敵に投降し、又或る者は(彼を)見捨て、又以前軽んじられし

⁵⁶ もとより、この *puruṣārtha* を「人生の目的」と取る事も可能である。

⁵⁷ For *puro-dhā*-, cf. Gonda.

者は喜ばん。(3)

真の友のみ彼(を捨てずに彼)を囲む。(されど) 恰も(頼りと為す最愛の) 仔牛を捕えられし牝牛の如く、捲土重来を期しつつも (*svasti-kāma*)、為す術もなく、憂苦する彼に同情するのみ、死せる (*pratīta*) 身内を悼むが如くに。(4)

以前重んじられ、友と思われし味方の者も、王の不幸に陥る時、その王位を狙う。されば汝はゆめ怯むべからず。友の汝を捨てる事なき様。(5)

汝の力、勇氣、見識の程を知らん欲すれば、我は敢えて暴言なし、恰も強者が弱者を激励する如くに、我は勇を鼓すなり。⁵⁸ (6)

若し我が言う所、正しく、又汝がそれを諒となせば、己(の所行)を正しからざりしと反省なし、勝利を期していざ立て、サンジャヤ。(7)

汝知らずとも、我等の国庫に大なる備え(蓄積)あり。我のみ独りそれを知る、そを汝に調達せん。(8)

その上、幾百の友、汝にあり、サンジャヤよ。彼等は苦樂に耐え、⁵⁹ (戦場に) 不退転の、一騎当千 (*śatārha*) の勇士なり。(9)

蓋し、成功を欲する男には(常に) 斯かる援軍あるものなり。時に些か落ち込む事あるとも、⁶⁰ 彼には敵を悩ます味方あり。(10)

息子曰く。

斯くの如き言辞を聞けば、たとえ小心の者とても、その心より闇の払われざる事あらんや。意義鮮明にして、句、音節も鮮やかなるこの言辞を。(11)

これなる重荷を我は、水中にても担うべし。又深淵にても渡るべし。過去未来を遙けく見続なわす君が、我が先導者なれば。(12)

我は、更に更に、君の忠告を聞かまほしと思えばこそ、折々反論なしつ

⁵⁸ *mayā...balavān iva durbalam* の読みは、話者の意図は判明するも、格の対応不可能。今は *uktam tejo-vivṛddhaye* の読みを採用しつつ、両者を折衷して訳文を試みた。

⁵⁹ 或いは *-saha* を *sama* (汝と苦樂を共にする) と読むべきか？

⁶⁰ *ujjihataḥ?*

つも、その度に黙して座せり (拝聴なす)。 (13)

甘露に人が飽く事なきが如く、母より辛うじて得し (忠告を耳にして)
飽かざるまま、我は今ここに、敵撃滅、勝利の為、奮励努力せん。 (14)

クンティー曰く。

駿馬の如く、彼は (母の) 言葉の矢に打たれ、促されて、教えのままに、
凡てを完遂なせり。 (15)

これなる、恐るべき鼓舞激励、最上の気力増進剤 (たる物語) を、大臣
は敵に悩まされて意気消沈せる王に聞かすべし。 (16)

「勝利」と名付けるこの伝えを、勝利を望む者は聞くべし。これを聞け
ば、直ちに敵を殲滅して、大地を得ん。 (17)

妊婦は、この男子誕生を促し、英雄誕生を約する物語を常に耳にせば、
英雄を出産する事必定。 (18)

又武人の妻は、学の雄、苦行の雄、自制の雄、信心深く、靈的繁栄に燃
え、拍手喝采を受け、光輝あり、力あり、運を呼ぶ、大戦士、大胆なれば、
嘗て敵し得ぬ、不敗の勝者、悪を懲らしめ、善を護り、勇猛空しからざる、
英雄を産む。 (19-21)

烈婦は武人の妻に相応しく、他からの同情を排して進取の気性に富み、
怒りを知る。彼女はバラモン行者の如き「托鉢」「物乞い」を潔しとしな
い。ここに我々はバラモンとクシャトリヤの生活信条の大なる懸隔を窺い
知ることが出来る。⁶¹

III 「悪女、淫女」(女性非難)

(III-1) 女の本性

これまで我々は「貞女」「烈女」を見て来たが、最後に「悪女」「淫女」

⁶¹ Cf. Hara “*śāstra versus śāstra*,” to be published in *Gedenkschrift J.W.de Jong*.

に関する章句を紹介する。蓋し女性を卑しめる思想は、男尊女卑を特徴とする古代インド社会に当然予想されるところであり、又出家遁世を奨める社会通念は女子を解脱の障り、諸悪の根源として排斥したが、より具体的文脈は「男を悩ます女の本性」に關している。既に RV.8.33.17 に帝釈天の述懐として「女心は御し難し。その性浮気なれば」⁶² と語られ、同様に箴言にも女性 (*strī*) に貞操 (*satītvā*) を期待するのは、泥棒 (*taskara*) に正義 (*dharma*)、娼婦 (*veśyā*) に愛情 (*sneha*) を期待するに等しいと言われる。⁶³

次の物語は「女の本性」を語るものとして、西欧語にもしばしば翻訳引用されるものであるが、⁶⁴ 以下にその全文を邦訳する事とした。語り手は他ならぬ女性自身で、彼女は同性を批判する事を最初は躊躇するが、仙人に請われるままに「真実を語る」として敢えて同性批判を憚らなかつた。彼女は身分の低い遊女であったから、その立場から取り澄ました良家の子女を批判し、その化けの皮を剥ぐ意図を有している (MBh .XIII.38)。

ユッディシティラは訊ねた。

バラタ族の最勝者よ、我、女の本性聞かまほし、蓋し女は諸悪の根源、浮気と聞けば。 (1)

ビーシュマは答えた。

この点に関しても、ナーラダと、娼婦パンチャチュウダーとの対話とい

⁶² *striyā aśāsyam manah/uta aha kratum raghum*. Cf. Fišer 81.

⁶³

*taskarasya kuto dharmo durjanasya kutaḥ kṣamā
veśyānām ca kutaḥ snehaḥ kutaḥ satyam ca kāmīnām
proṣitasya kuto mānaḥ kopanasya kutaḥ sukham
strīṅām kutaḥ satītvam ca kuto maitrī khalasya ca (IS.2511)*

⁶⁴ Cf. Meyer 496-498, Bolleé 117-120.

う古い物語が伝えられている。(2)

昔、世界を遍歴していた思慮深い神仙ナーラダは、非の打ち所無き梵界の天女パンチャチュウダーに出会った。(3)

四肢麗しきこの天女に会って、仙は彼女に訊ねた。「我が心に懸る一つの疑問がある、腰麗しき女よ、それを解いてくれ」と。(4)

斯く言われて彼女はナーラダ仙に答えた。「問題がまともで、私がお答え出来るとお思いなら、お答え申しましょう」と。(5)

ナーラダは言った。

「私は決して矢鱈な事を汝に頼む積りはない、顔麗しき女よ、女の本性を汝から聞きたいのだ」と。(6)

ビーシュマは言った

神仙のこの言葉を聞くと、かの天女の最勝者は答えた。「女の身でありながら、女を非難する事は出来ません」。(7)

貴方は、女が本来どんなものか先刻御存知です。神仙様、私にこの様な質問をなさってはいけません」と。(8)

神仙は答えた、「腰麗しき女よ、真実を述べよ、嘘を言うとは過失があるが、真実を言えば過失はない」と。(9)

そう言われると、可愛らしく笑う彼女は決心して、女の万古不易にして、真実なる過失を語り始めた。(10)

パンチャチュウダーは言った。

「女は家柄良く、美貌で、夫がいて (*nāthavatī*) も、とかく粹 (*maryādā*) を踏み外す、これこそ女の過失であります、ナーラダ様。(11)

卿も御存知の通り、女より悪い者は無く、女は諸悪の根源であります。(12)

令名高く、お金持ちで、お似合いで、何でも聞いてくれる夫でも、女は機会があれば、彼に我慢して仕える事が出来ないのです。(13)

でも、私共女性が、(たとえ相手が) 悪い男であっても、(彼に) 羞恥心を捨てて身を任せてしまうのは、私共の本当に良くない本性です。(14)

女を求めて近付き、ちょっとよくしてくれる男を、女は欲しがります。(15)

男達に求愛されない事、周りの人(の噂)が怖い事の故に、本来不羈奔放な女 (*amaryādā*) でも、分限 (*maryādā*) を守って、何とか夫にくっ付いているのです。(16)

彼女達にとって男なら誰でもよい、年齢も問わず、美醜も問わず、男であると言うだけで、女は相手を享受する。(17)

女が主人にくっ付いているのは、恐怖の故でも、同情の故でも、財産の故でも、親戚、家柄関係の故でもありません。(18)

若くて、綺麗な飾りや衣服をつけた自由気儘な女 (*svaira-vṛttā*) を、(本当は) 良家の子女は(心の中で) 羨んでいるのです。(19)

常に尊敬され、大事にされていても、せむし (*kubja*)、盲 (*andha*)、不具 (*jaḍa*)、小びと (*vāmana*) の男を好きになる。(20)

びっこ (*paṅgu*) でも、又蔑視されている様な男でも、女にとってこの世に男なら誰でもよい。(21)

(他の) 男に近付く術がなく、互に働きかける術がないから、(女は) 夫にくっ付いているだけの話です。(22)

偶々男が手に入らない、周り(の噂)が怖い、(ばれたら) 死刑や捕縛が怖い、そんな事から彼女達は何となく護られているのです (*gupta*)。 (23)

賢い人が言う通り、女は本質的にうつろい易く、御し難く、捉え難きものなのです。⁶⁵ (24)

火が薪に、大海が川に、死神が一切生類に満足しない様に、見目麗しき女達は男に(嘗て) 満足しない(多多益々弁ず)。(25)

神仙よ、これは一切女性の今ひとつの秘密ですが、よい男を見た途端、女の陰部は湿ってくるのです。(26)

各種の欲望を満たしてやっても、尊敬を払って宥めて上げて、又よく護ってやっても、女はこの様な最高の夫を好みません。(27)

各種の欲望を満たしてやっても、装飾品や財産を積んでやっても、愛欲

⁶⁵ Bollée は cd の比喩を *durgrāhya* のみにかけて、「賢者の言の如く、理解困難」と訳している。

を満たしてやる程には、女は評価致しません。 (28)

死神、巡查、死、地獄、地獄門 (*vaḍavā-mukha*)、剃刀の刃、毒、蛇、火---これら数ある怖いものに、一人の女は匹敵します。 (29)

造物主によって五元素、諸世界、男女が創造された始めから、女の過失はその様に造られているのです。 (30)

(III-2)

上の「女の本性」に、心優しく五体満足な理想的な夫がいても、女は彼を捨てて不具者に走ると言われた (MBh.13.38.20-21) が、それを立証する物語が存在する。女性非難で知られる Pali *Kuṇāla-jātaka* (536) は、優しい夫を裏切って「頭の胴体にめり込んだ矮人」(*kavandha*)、⁶⁶「せむし」(*khujja*)、⁶⁷「いざり」(*pīṭhasappin*)、⁶⁸「びっこ」(*khañjaka*)⁶⁹ と共に悪事を働いた王妃や良家の子女の物語を伝えている。それは又梵文学にも夙に知られた所であるが、以下に同一の主題が「物語」「小説」「説話」等幾つかの異なった形で伝えられている例を一つ紹介するであろう。

(III-2-1) *Pañcatantra* 4.5 (*strī-jāty-aviśvāse brāhmaṇi-paṅgu-kathā*)

昔、或る所に一人のバラモンが住んでいた。彼にとってその妻は命よりも大事であった。併し彼女は毎日家族の者と喧嘩ばかりしていた。かのバラモンはこの種の喧嘩に耐えられず、妻を可愛がっていたから、家族を捨てて妻と二人で遠い異国に旅立った。

程なく大きな森 (荒野) の真ん中で妻は言った。「あんた、喉が渴いて

⁶⁶ J.5.424.18=Bollée 22.7. See also his note on p.95.

⁶⁷ J.5.426.20=Bollée 25.18.

⁶⁸ J.5.424.18=Bollée 22.7, J.5.426.20=Bollée 25.18, J.5.437.32=Bollée 47.12, J.5.438.8, 11, 26=Bollée 47.24, 48.2, 21, J.5.440.9, 15=Bollée 51.12, 18.

⁶⁹ J.5.443.32=Bollée 57.12.

苦しいの、どこかで水を探して来て」と。そこで彼は直ちに水を持って戻って来ると、彼女は既に死んでいた。彼は愛しさの余り落胆して喚いていると、天上から声が聞えて来た。曰く「バラモンよ、若しお前が自分の寿命の半分を与えるなら、お前の妻は蘇生する」と。それを聞くと彼は身を清めて、三度口に出して（誓いの程を唱えて）、⁷⁰ 自分の寿命の半分を与えた。⁷¹ 唱えた途端に彼女は生き返った。

そこで二人は水を飲み、森の果物を食べて旅を続けた。程なく或る都の外れの花の庭園に入ったバラモンは妻に言った。「可愛い人よ、私が食べ物を持って戻って来る間、ここで待って居なさい」と。そう言って彼は都の中心街に出掛けて行った。するとこの花の庭園の中で一人のびっこの男が、井戸の釣瓶を廻しながら美しい声で歌を歌っていた。それを耳にするや否や彼女は愛の矢に射られ、彼の所へ近付いて「可愛いお人よ、若し貴方が私を愛してくれないなら、貴方は私に纏わる女殺しの罪を犯す事となりましょう」と言った。びっこは言った。「病に冒されている私が、何をしたらよいのですか」と。彼女は答えた。「それは言わずと知れた事、どうか私と交って」と。それを聞いて彼は言われる俥にした。愛の交わりを済ませると、彼女は「これからは一生涯私は貴方のものよ。ですから貴方は私達と一緒に出掛けなさい」と言った。彼も「宜しい」とそれに同意した。

一方、バラモンの方は食べ物を持って戻って来て、彼女と一緒に食べようとした。すると彼女は「このびっこの方もお腹が空いています。ですからこの人にも少し分けて上げて下さい」と言った。言われる俥にそれが為されると、彼女は更に「バラモン様、道連れなしで、貴方が別の村にお出掛けの際は、私に話し相手も居ないのです。ですからこのびっこの人と一緒に連れて行きましょう」と提案した。彼は「俺は自分さえも自身で支えきれないでいるのに、どうしてこの上このびっこを」と言った。すると彼女は「籠の中に入れてこの人を、私が連れて行きますから」と答えた。彼

⁷⁰ 原 1982

⁷¹ Hara, 1994.

女のこの嘘の言葉に迷わされて、彼は承諾してしまった。

その様にしていると、或る日井戸の側で休んでいたバラモンは、(今は)このびっこの男にすっかり惚れこんでしまった彼女によって、井戸の中に突き落とされた。一方、彼女はびっこと一緒に或る町に着いた。そこでは、通行税の誤魔化しを看視する為に警官達が張っていた。彼等は彼女の頭に担いでいる籠に目を留めると、それを強引に引たくって王の前に持って行った。王がそれを開いて見ると、かのびっこが現れた。バラモン女の方も、喚きながら警官達の直ぐ後について行った。そこで王は「一体これはどうした事だ」と彼女に訊ねた。彼女は答えて「これは病気を患っている私の夫で御座います。親族の者が挙って気味悪がりますが、私は愛情に心が絆されて、頭に担いで貴方の都に参りました」と言った。それを聞いて王様は(感心して)、「バラモン女よ、君は私の妹だ、村落二つを授けるから、夫と共にここで安楽に過ごしなさい」と仰せになった。

一方、かのバラモンは、ふとした事で或る親切な人に井戸の中から救い上げられ、足の赴くままに同じ都にやって来た。かの悪妻は彼を見て王様に「王様、私の夫の仇敵がやって来ました」と奏上した。王様も彼に死刑を宣告した。彼は「王様、彼女は私の大事な或る物を奪ったきり、(返さずに)今尚持っています。若し王様が人の道を大事になさるのであれば、それを彼女に返させて下さい」と言った。王は「芽出度き婦人よ、汝が彼の或る大事な物を今以て持っているなら、それをここに差出しなさい」と仰せになった。彼女は「王様、私は何も持っておりません」と答えた。バラモンは「私が正しく三度宣言して、自分の寿命の半分を与えたのを、今ここで返しておくれ」と言うと、彼女は王を怖れてその場で「まさしく彼は三度宣言して、寿命の半分を(私に)呉れました」と述べた。途端に彼女は息絶えてしまった。王は吃驚して訊ねた。「一体これはどういう事か」と。バラモンは以前の事柄の一部始終を王に報告した。

(III-2-2) Daśa-kumāra-carita (p.218.1-220.11 NSP.)

昔、或る所にトリガルタという土地があった。そこにはダニカ、ダーニ

カ、ダニヤカという三人の兄弟が、夫々所帯を持って裕福に暮していた。ところが或る時、12年間の旱魃に襲われて穀物は稔らず、草は枯れ、樹木は実をつける事無く、雨雲が出て空しく、河川に水は流れず、池は泥土を残すのみ、泉は涸れ、球根や果実も乏しくなり、談笑は止み、祝祭は途絶え、群盜はびこり、生類は互に食べ合い、鶴の様に白い人間の頭蓋骨があちこち転がり、鴉は艶もなく飛交い、都も町も村も山の部落もすっかり荒れ果ててしまった。

彼等三人の所帯持ちは、全ての穀類を食い潰し、山羊、水牛、牛の群れ、奴婢達、子供から、長男と次男の嫁をも順次食べ、「明日は末弟の嫁ドーミニーを食べよう」と決議した。すると末弟のダニヤカは愛しい自分の妻を食う事が出来ず、彼女と共にその晩逐電した。彼は、旅に疲れた妻を背負って森の深みに入って行った。彼が、自分の肉と血を与えて、辛うじて飢餓を忍んでいた彼女を連れて歩いていると、程なく手足と耳鼻を削がれて、地面を這って歩いている男に出くわした。心の優しい彼は、この男をも肩に担いで、果物球根、野生動物の豊富な森の奥に、苦勞して茅葺の小屋を造り、暫くそこに住んでいた。

イングダーの油等でその傷を治してやり、又肉や野菜を与えて、彼はこの不具者を自分同様に養っていた。その結果すっかり肥り、その「根」も元気になって⁷²来た彼を見て、色情を起したかのドーミニーは、夫ダニカが狩に出た留守に、彼に近付いた。彼に牽制、威嚇されたにも拘わらず、彼女は無理矢理彼と交わってしまった。帰宅して水を求めた夫には、「井戸から汲み上げて自分で飲みなさい、わたしは頭が痛い」と言って、縄と共に釣瓶を彼の前に投げた。彼女は(彼の)直ぐ後からついて行って、彼が井戸から水を釣瓶で汲み上げているところを、後ろから衝いた。

不具者を背負ってあちこち徘徊しているうちに、彼女は貞女の評判を得、又数々の供養を受けた。そして又、アヴァンチ国の王の厚遇により大變裕

⁷² この合成語 *udrikta-dhātu* はもとより人体構成要素としての3 *doṣa=vāta, pitta, ślesman* の義に取る事も可能であるが、手足を削がれたこの男の特定器官、男根勃起の意味にとる方が適当と思われる。

福に暮していた。

さて或る時、彼女の夫は、水を求めていた一群の隊商に偶々（井戸の中にいる所を）見つけられて（そこから）引き上げられ、アヴェンチ国に食を求めて徘徊していたが、その時かのドーミニーは彼を見つけて、王に「あの男こそは、私の夫を不具にした犯人です」と告げた。彼女に唆されるまま、何も知らない王は、この善良な男を死罪にってしまった。ダニヤカが、両手を後ろに縛られて刑場に曳かれて行った時、未だ寿命があったと見えて、彼は堂々と刑吏に向かって言った。「若し私によって不具にされたという乞食（比丘）が、本当に私が悪事を働いたと認めたなら、その時は私は刑に服します」と。刑吏は「別段差し支え御座らぬ」と言って、彼に引き合わされた時、この不具者は眼に涙を浮べたまま、この罪なき善人の足下に伏し、彼の施した恩と、嘘吐きな彼女の悪行を率直に認めた。王は怒って、悪行なした彼女の顔を醜くして、犬どもの餌食にってしまった。一方ダニヤカの方は恩寵を受ける身となった。それで私は言うのです「女心は残忍である」と。

(III-2-3) Kathā-sarit-sāgara 65

さて翌日夜、ゴームカは以前の如く、ナラヴァーハナダッタを慰める為、彼に次の様な物語を話しました。(1)

或る町に、或る富裕な商人の息子が、菩薩の分身となって誕生しましたが、彼は早く母を失いました。(2)

再婚した父は、新婦に執着して彼を遠ざけ、森に住む様追放したので、彼は妻と共に家から出て行きました。(3)

彼の弟も、彼同様に父に嫌われて彼に随行して来ましたが、むら気なので彼は弟を見捨て、別れました。(4)

歩いて行く中に糧食も無くなり、彼はいつしか水も草も木もなく、灼熱の太陽に熱せられた大きな砂漠に着きました。(5)

七日間その中を歩いていると、妻が飢えと渇きに疲れ果てたので、彼は自分の肉と血を与えて生き伸ばしてやりましたが、彼女は悪い女でしたか

ら、それらを(平気で)摂取しました。(6)

八日目に、彼は川の流れの音の聞える、山中の森に着きました。そこには美味しい果物と豊富な蔭を提供する木々があり、又柔かい緑の苔が敷かれてありました。(7)

そこで彼は疲れた妻に球根、果物、水を与えて満足させ、波立つ溪流に降りて行って沐浴しました。(8)

するとその流れの中に彼は、両手両足を切られた男が激流に流されながら、救いを求めているのを見ました。(9)

すると情け深いこの摩訶薩は、永い断食の末のこと、自分自身も疲れていたのですが、その川の中に飛込んで、この男を救い上げました。(10)

陸に引揚げてから、「兄弟よ、誰がこんな事をしたのか」と慈悲深い彼が訊ねますと、この丸っこい男は言いました。(11)

「悶死させようと企てた敵人達が、手足を切って私を川に投込みましたが、貴方が引揚げて下さいました」。(12)

この様に答えた彼に、摩訶薩は包帯を播いてやり、食事を与えてから、その後で自分の沐浴その他を行いました。(13)

その後、菩薩の化身である商人の息子は、球根や果物を食べながら妻と共に森の中で苦行をしながら過ごしました。(14)

或る時、彼が果物や球根を探しに出掛けた際に、愛欲に悩んだ彼の妻は、この今や傷の癒えた片輪者と愉しみました。(15)

彼女に惚れ込んだ彼と相談して、この悪行の女は夫の殺害を企て、翌日策略を用いて仮病を装いました。(16)

降りて行くのも困難な、渡り難い川沿いの断崖に生えている薬草を示して、悪性の彼女は夫に言いました。(17)

「若し貴方が、この私を生き長らえさすお積りであれば、私にあの薬草を持って来て下さい。神様が夢の中で、あそこにあるものをお告げになったのです」と。(18)

それを聞くと彼は「よし」と言って、薬草を手に入れる為に、草を編んで縄を作り、それを木に結んでから、その崖に降りて行きました。(19)

降りて行った彼のその縄を切って放すと、彼は川の中に転落し、激流に

(吞まれて) 流されて行きました。(20)

川の流れのままに遠くに流されて行きましたが、彼は(自分の)善行によって護られ、或る町外れで岸に辿り着きました。(21)

そこで彼は上陸して女の(ひどい)所行を思いながら、木の下で水に転落した疲労を癒していました。(22)

その時たまたま、その国の王が亡くなりましたが、この国には王が亡くなると、古来次の様な仕来たりがありました。(23)

国民によって練り歩かされた吉祥な象が、その鼻の先で自分の背中に引揚げた男が、(次の王となって)王位に灌頂されるというのです。(24)

するとこの象は、恰も堅忍不拔に満足した造物主の様に、彷徨いながら彼の近くにやって来て、この商人の息子を(鼻で)突き上げて自分の肩の上に載せました。(25)

すぐさま大臣達は彼を都に連れて行き、この菩薩の化身である商人の息子は、王位に即かされてしまいました。(26)

王位に即いた彼は憐憫、喜び、忍耐⁷³を大事にして、浮気な悪女共とは戯れませんでした。(27)

一方、彼の妻は彼が川に攫われたとばかり思って、何一つ心配なく、かの片輪の愛人を肩に背負ってあちこち彷徨いました。(28)

「これなる私の夫は敵人に手足を切られ、貞女の私は物乞いして彼を養っているのです、ですからどうぞお恵みを」(29)

と言って彼女は村から村へ、町から町へと物乞いしつつ、今や王位に即いている自分の夫の都にやって来ました。(30)

何時もの様に、そこで物乞いしていると、彼女が都の人達に貞女と讃えているのが、何時しかかの王様の耳に届きました。(31)

片輪の男を背中に背負ったこの女を、遠くから彼女と認めた王は彼女を召還し、「一体その貞女はどこにいるのかな⁷⁴」と訊ねました。(32)

⁷³ 前二者はもとより四無量心の悲と喜である。全て女性名詞の善徳に相当し、後半の悪女に対応している。但し「忍耐」(*kṣānti*)を「慈」(*maitrī*)と同義に取る事も可能である。この点に就いては Maithrimurthi 52.

悪女は、王威に輝く自分の夫とは知らずに「王様、ここに居ります私が貞女であります」と答えました。(33)

するとかの菩薩の化身である王は、笑って彼女に言いました。「いかにも、朕も亦この眼で汝の貞女振りを、結果共々、目の当りしたというわけだ。(34)

でも、五体満足な自分の夫が、その血と肉を与えても、尚自分の言う通りに出来なかった人間の形をした羅刹女、(35)

その女が、朕の血と肉を吸い取っておきながら、しかもこんな片輪の男の言いなりになって、挙句の果てはその乗物にされているのは、一体どういう事なのか。(36)

一体、汝によって川に突き落とされた罪も無い本当の夫を、汝は嘗て背負った事があったか⁷⁵。この業により、汝は現在この片輪を背負って、扶養しているのだ」(37)

と王がその過去の所行を暴露した時、始めて夫と気付いて、彼女は恐怖の余り失神し⁷⁶、絵に描いた様に（不動と）なり、死んだようになりました。(38)

「王様、これはどういう事ですか、お聞かせ下さい」と興味津々の大臣達に尋ねられて、王は彼等に事の次第一切を物語りました。(39)

そして、夫を害したのを知って大臣達は、彼女の耳と鼻を殺ぎ、烙印を押し片輪の男と一緒に国外に追放しました。(40)

斯くして運命は、耳と鼻の無い女と手と足の無い男、菩薩と王威⁷⁷とを結びつけて、相応しい結合を示しました。(41)

⁷⁴ 文脈はもとより皮肉を籠めての発言である。 *kā sā pati-vratā* は梵文戯曲の序にしばしばみえる女優の *iyam asmi* (私はここにおります) と同様に location の意味合いがあると思われる。次行の *sāham pati-vratā* も同様である。

⁷⁵ *ūḍha* はもとより次下の *vahasi* に対応して、共に語根 *vah-* に由来するが、同一語根に「結婚」の義ある故に、上のように邦訳した

⁷⁶ 字義通りならば、「硬直」と訳すべきである。

⁷⁷ *nr̥pa-śrī* の *śrī* はもとより女性名詞である故である。尚、王と *śrī* の関係については Hara, 1996-1997.

この様に、女心がどこに向かって進んでいくか測り難い、それは運命がとかく無思慮で、つまらぬ者に最良するのに似ています。 (42)

この様に、操を捨てず、勇氣あり、怒りを抑えた男達の許に幸運は満足して、思量しなくても自然に近付いて来るものなのです。 (43)

(III-2-4)

この三つの伝承は細部に異同があるが、同一の主題を伝えている事に疑いを容れない。第一のものは「寿命の半分賦与」の主題をもつが、後二者はより具体的に「血と肉」を与えた事になっている。不具者も前者ではびっこであり、他の二者ではいざりである。男の受難の場は前二者では井戸であるが、第三のものはこれに替るに激流を以てしている。又、第三のものは「王選出」⁷⁸に特殊な習慣を伝え、又仏教的な彩りをもっている。

(III-3)

上の MBh.XIII.38.25に「女が飽く事を知らずに男を求めるのは、恰も火が薪に嘗て満足しないのに等しい」と言われているのを見たが、それを例証するものとして或る牛飼いの妻が巡查父子と交わる経緯を描く物語がある。但し文脈は不貞女を咎めるより、差し迫った危機に対処する知恵を説いている (Hitopadeśa 2.6)。

火急な事の起った際に、冷静な判断 (*mati*) を失わぬ者は
危機 (*durga*) を脱する、恰も牛飼女が二人の情夫を救った様に。

Karaṭaka は訊ねました。「一体それはどういう事ですか」と。

⁷⁸ 通常は王権の象徴たる象、馬、灌頂用の瓶、扨子、傘の5 (*pañca-divyādhivāsa*) がこの種の文脈に現れる。 Cf. Edgerton 159, Tawney 5.175-7, Steermann-Imre 162-4 and 274-7.

Damanaka は説明しました。

昔 Dvāravatī の都に、或る牛飼いの不貞妻がいました。彼女は村の巡查長と彼の息子と情を通じていました。世に次の様に言われているのも尤もです。

火は薪に、大海は河川に、
 死神は一切生類に、女は男に満ち足りる事なし
 更に又、
 贈物、敬意、廉直、奉仕、
 武器、教えによるも不可、何に抛るとも女は御し難し
 何となれば、
 徳を積み、名誉あり、愛らしく、粹で、金持ち、又若いのに、そんな夫をさっさと捨てて、女は身持ち良からず、徳もない別の男の許に走ります
 又、
 兎角女という者は、いくら綺麗なベッドに寝かせても、
 茨の茂る地面に身を投げて、惚れた間男と戯れて、愉しむ程には飲ばぬ

或る時、彼女は巡查長の息子と愛を愉しんでいましたが、偶々親父の巡查長も彼女と愉しもうとやって来ました。親父の来るのを見た彼女は、息子を穀物倉庫に入れて、巡查長と同じ様に戯れ始めました。すると今度は、彼女の夫の牛飼いが牛小屋から戻って来ました。それを見て牛飼いの妻は、「巡查長殿、あんたは棍棒を持って怒った振りをして急いで出て行った下さいまし」と言いました。彼が彼女の言う通りにした時、牛飼いは家に帰って来て妻に訊ねました。「何の理由で、巡查長がここにやって来ていたのだ」と。彼女は（咄嗟に）「何か故あって、あの人は息子さんに腹を立てています。一方彼（息子）はここまで追われながら、ここへ飛込んで来たので私は彼を穀物倉庫に入れて守って上げたのです。親父はここまで追いかけて来て、探しましたが見つかりませんでした。そんな訳で、あの巡查

長は怒ったまま出て行ったのです」と答えて、例の息子を穀物倉庫から外に出して、夫の前に連れて来ました。実にこの様に言われています。

女の食欲 (*āhāra*) は (男の) 二倍、機転 (*buddhi*) は四倍、
決断 (*vyavasāya*) は六倍、愛欲 (*kāma*) は八倍。

上の物語にあって牛飼いの妻は、咄嗟に機転を利かせて⁷⁸決断し、当座の危険を乗り越えた。尚、最後の女性の性欲は男性の八倍となす文言は、女性の性感が男性のそれを遥かに上回るとなす物語と比較されるであろう。⁷⁹

Abbreviations

- IS. :O.Böhtlingk, Indische Sprüche I-III (Osnabrück Reprint 1966)
 J. :The JātakaI-VII ed., by V.Fausbøll (Pali Text Society)
 MBh. :The Mahābhārata (Poona Critical Edition)
 MS. :The Manusmṛti (Nirnaya Sagar Press, Bombay 1946)

Bibliography

- Bollée :W.B.Bollée, Kuṇārajātaka, being an edition and translation (London 1970).
 Edgerton :F.Edgerton, “Pañcadivyaḍhivāsa or Choosing a King by Divine Will,” Journal of the American Oriental Society 33 (1913) pp.158-166.

⁷⁸ 女性の機転 (*strī-buddhi*) には Uṣanas も Brhaspati も敵わないと言われる。
uśanā veda ya chāstram yac ce veda brhaspatiḥ
strī-buddhyā na viśiṣyete tāḥ sma rakṣyāḥ katham naraiḥ
 (MBh.13.39.7)

⁷⁹ Cf. Meyer 380 note 2, and 原 2001.p.966, Fišer 64, Bollée 113.

- Fišer :I.Fišer, *Indian Erotics of the Oldest Period* (Praha 1966).
- Gonda :J.Gonda, "Purohita," *Studia Indologica* (Festschrift W.Kirfel) (Bonn 1955), pp.107-124.
- Hara 1959 :M.Hara, "A Note on the Sanskrit Word *ni-tya*," *Journal of the American Oriental Society* 79 (1959), pp.90-96.
- 1986 :—"The Holding of the Hair (*keśa-grahaṇa*)," *Acta Orientalia* 47 (1986), pp.67-92.
- 1994 :—"Transfer of Merit in Hindu Literature and Religion," *The Memoirs of the Toyo Bunko* 52 (Tokyo 1994), pp.103-135.
- 1996 :—"Āṅṛṇya," *Langue, style et structure dans le monde indien*, Centenaire de Louis Renou, ed. N.Balbir et G.-J.Pinault (Paris 1996), pp.235-261.
- 1996-1997 :—"Śrī—Mistress of a King," *Orientalia Suecana* XLV-XLVI (1996-1997) pp.33-61.
- 2001 :—"Hindu Concept of Anger: *manyu and krodha*," *Serie Orientales Roma* XCII-1 (2001) pp.419-444.
- Maithrimurthi :M.Maithrimurthi, *Wohllollen, Mitleid, Freude und Gleichmut*, (Stuttgart 1999).
- Meyer :J.J.Meyer, *Sexual Life in Ancient India* (Indian Reprint 1971).
- Roesler :U.Roesler, *Licht und Leuchten im Rigveda* (Swisttal-Oendorf 1997).
- Steermann-Imre :G.Steermann-Imre, *Untersuchung des Königswahlmotivs in der indischen Märchenliteratur: Pañcadivyaḍhivāsa* (Wiesbaden 1977).
- Tawney :C.H.Tawney, *The Ocean of Story*, vol. 5 (Indian Reprint 1968).
- Thieme :P.Thieme, *Kleine Schriften* (Stuttgart 1984).

- Wezler 1978 :A.Wezler, Die wahren “Speiseresteesser” (Skt. *vighasāsin*) (Wiesbaden 1978).
- 1996 :——“An Internal Contradiction in the ‘Mṛcchakaṭīka’? Some remarks on Impalement in Ancient and Mediaeval India,” Festschrift D.Schlingloff (Reinbek 1996) pp.287-306.
- 池田澄達 :マハーバラタとラーマヤナ (東京 日本評論社 昭和19年)
- 原 1968-9 :原実「Kṣatra-dharma—古代インドの武士道—」東洋学報 51 (1968-9) pp.304-271, 456-420, 606-597.
- 1982 :——「三度び」 田村芳朗博士還暦記念論集 (東京 1982) pp.527-543.
- 2001 :——「二つの性転換物語」 田賀龍彦博士古稀記念論集 (東京 2001) pp.974-960.

Summary

Women in Ancient India (III) (English Summary)

Minoru Hara

The present article contains a Japanese translation of the well-known stories of three different types of women in ancient India.

- (1) The first is the story of the type of chaste woman as is related in the Mārkaṇḍeya Purāṇa 16. The irritable sage Māṇḍavya cursed her poor husband to lose his life upon the sun-rise. When hearing this, the devoted wife decided to prevent by the virtue of her chastity the sun-rise and thus succeeded in protecting her husband's life. For ten days the sun did not rise and darkness prevailed. Gods worried about this because they are afraid of a shortage of food in the morning sacrifice performed by the pious human beings. They resorted to another chaste woman, Anasūyā, who promised them to restore the sun by the power of her chastity. She raised the sun and the curse was materialized. Then Anasūyā revived the dead husband by *satya-vacana*.
- (2) The second illustrates the type of energetical woman as related in the Mahābhārata 5.131-134 (*Vidurā-putrānuśāsana*). In this story a Kṣatriya woman rebukes her son who abandoned the battle-field and encourages him to go back to war for further fight. Here we have the ideal of a Kṣatriya woman.
- (3) The third (found in Mahābhārata 13.38) speaks of the evil nature of woman (*strī-svabhāva-kathana*). Being requested by the sage Nārada, a divine courtesan Pañcacūḍā enumerates various sorts of evils essential to the woman's nature. In order to illustrate this I

have also translated a story given in the Pañcatantra 4.5 and its variations in the Daśakumāracarita 6 and Kathāsaritsāgara 65 where a merciless woman betrayed her loving husband by her fickle misdeed with a cripple. Finally, I have also translated a relevant story in the Hitopadeśa. It concludes with a verse saying that a woman surpasses a man twice in appetite (*āhāra*), four times in cleverness (*buddhi*), six times in determination (*vyavasāya*), and eight times in sexual desire (*kāma*).

*Professor,
International College
for Advanced Buddhist Studies*